

善をもって悪に勝ちなさい

奨励	野田 和人〔のだ・かずひと〕
奨励者紹介	日本キリスト教団神戸栄光教会牧師

愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに相手を優れた者と思いなさい。怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい。希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。喜び人と共に泣きなさい。互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさなさい。愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『「復讐はわたしのすること、わたしが報復する」と主は言われる」と書いてあります。「あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい。

（ローマの信徒への手紙 12章9－21節）

復讐(1)

今日、司式の丹羽さんにお読みいただいたローマの信徒への手紙の箇所は、初めの9節にある「愛」という言葉をキーワードに、「愛」について記されているところですが、使徒パウロはここで抽象的な愛について語ろうとしているものではありません。そうではなく、実践的な愛の勧めを具体的に展開しているところです。そこで今日はこのうちの14節、「あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません」と、それを掘り下げて展開している17節以下に、特に「復讐」という言葉に注目して、しばらくの間皆さんと一緒に見ていきたいと思います。

復讐(2)

私たちはこの世に生きている限りは、いやな目に遭ったり不当な扱いを受けたり、自分のことでなくても愛する者のことで大きな苦しみを受けたりすることがあります。そのような仕打ちに対して、時には恐ろしいほどの怒りがこみ上げてきて、仕返しを強く願う気持ちが頭をもたげられます。そしてこの願望は、受けた恨みを晴らそうとする行動は、人間の自然な本性の表れとして、たとえば仇討ちや、フィクションとしての「必殺仕事人」のように正当なこととして考えられてきました。

けれども、もしこれが正当であるというのなら、この仕返しや復讐の連鎖は全く断ち切ることのできないものとなります。なぜなら、敵の悪に報いるために私の用いる方法が、報復の掟の原則に照らしてたとえどれほど正当化されているように見えたとしても、それはやはり今度は私によって引き起こされる悪にすぎないからです。同じレベルで繰り返される悪に対して、報復が止むことはないでしょう。悪をもって悪に対応することは、悪が私に打ち勝った、私が悪に打ち負かされたことになるのです。

私たち人間の復讐は、それをたとえ正義だとか聖戦という言葉で言い表したとしても、それが人間から出たものである限り、その袋小路から、悪の連鎖から、私たちが抜け出すことはできません。それは使徒パウロの時代から2000年を経た現代世界を見渡しても、些細な出来事から重大な事柄に至るまで、世界の至る所ではっきりと見てとることのできるものです。

憐れみ(1)

それではどうすればよいのでしょうか。

私たちはまず気づく必要があります。私たちは生かされてここにいるのだということを。私は憐れみを受けた、憐れみを受けて今ここに生かされているのだということを。

私は、私一人の罪の道を、悪の道を歩んでいた時、神さまよりもその悪を愛していた時、それにもかかわらず神さまは私を愛してくださっている、大切にしてくださっているという声を聞いたのです。その時、主イエスが私を見つけだし、支えてくださった。彼は私を慰め、私のすべての罪を赦し、私の悪を数え上げることをなさらなかった。私の悪は数え上げられなかったのです。そのようにして私たちは憐れみを受けたのです。そしてそのようにして、神さまはご自分の敵に、すなわち私に、私たちに打ち勝たれたのでした。

私たちはこのことに決して鈍感であってはならないと思います。主イエスは、彼のことをよく思わない敵の真っ只中の十字架の上で、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないです」と祈られました。十二弟子らによって選ばれたステファノも、彼を迫害する敵の投げつける石を受けながら、「主よ、この罪を彼らに負わせないでください」と祈ったのです。このような憐みのうちにいるあなたたちならば、たとえ耐えられないような苦しみの中にあっても、自らが悪を引き起こして争いの源となってはならない。そうではなくて、かえって平和の源となるようにとパウロは勧めているのです。

憐れみ(2)

平和の源、それは「赦すこと」にあります。この「赦し」に私たちが悪の連鎖から、人間の復讐の袋小路から抜け出す鍵があります。「復讐はわたしのすること」と神さまは言われますが、神の復讐は、イエス・キリストにおいて、その十字架の死とそこからの復活においてすでになされたということです。神はその御子において、私たちのすべての罪を告発し罰せられました。神さまがそのように御子をとおして、ご自分で、私たちのどうしようもない破れ・破綻を背負われたことこそが神の復讐であり、神さまはそのことによってご自分の敵を、私たちを赦してくださいましたのです。

ここに憐れみがあります。この憐れみに打たれて、私たちは悔い改めて新たに生かされることができるのです。そうであるならば、私たちは私たちの敵に対しても、悪に対しても同じように接するほかはないのです。それが私たち人間の復讐を空しくする「神の復讐」であり、パウロがここで語っている「善」なのだと思います。

和解(1)

悪に打ち負かされてはならない、むしろ善によって、赦しによって、悪を打ち負かしなさい。不可能でしょうか。主イエス・キリストは、私たち一人ひとりにそのようにしてくださいました。ご自分の身を献げ尽くして、私たちと神さまとの間の和解の道を開いてくださり、私たち自身の間にある、また私の内にある敵意という隔ての壁を取り壊してくださいました。私たちには、このイエスに導かれて、「善をもって悪に打ち勝った」数多くの先達たちの、そして多くの同時代人の足跡が見えています。その跡を辿ることは、私たちにも可能だと思います。

和解(2)

1948年から1990年まで、43年間続いた南アフリカ共和国のアパルトヘイト＝人種隔離政策が撤廃されたあと、1994年に「真実と和解委員会」が設立されました。そしてこの委員会をとおして、人びとは苦痛、悲しみ、怒りを表明する機会をもつことができました。夫や子どもを手にかけて相手と向き合い、愛する家族がどのように亡くなっていったのか、拷問や死の恐怖がどのようなものだったのかを、そこで知ることができたのです。これは被害者にとっても、また罪の意識にさいなまれる加害者にとっても、身を切られるような体験でした。しかしそれは憎しみと憤り、自責の念でいっぱい自己を浄化する作業でもありました。真実を知って、夫や子どもを手にかけて相手を赦し、悔いる相手と和解し、互いに受け入れ合うことのできる未来へ向けて道を切り拓くことができたのです。人類はこのような道を歩むこともできることを彼らは証明しました。

ネルソン・マンデラ元大統領と共にこの活動の中心となったデズモンド・ツツ大主教の言葉に聴きましょう。

「そうです。私たちは恐怖と苦悩によって荒れ果てていました。しかし私たちはこの地の驚くべき人々に圧倒されてもきたのです。苦しめられ、『真実と和解委員会』に証言したほとんどの人々は、私たちを、そして世界を驚かせました。その精神の気高さで寛容さで、彼らは自分たちを苦しめた人々を赦す用意ができていたのです。彼らはこの新しい南アフリカという奇跡を可能にした人々なのです。世界中が注目し、驚嘆しています。彼らの赦しの申し出が明らかになり、そしてそのことによって他の人々が促されて赦しを乞うようになりますようにと、私たちは祈ります。その時こそ、この奇跡が完成するのです」（出典不詳）。

これは今から18年前、皆さんが生まれたころの言葉です。私たちも、この奇跡を完成させることができることを信じて、主にある平和を固く保つ信仰を示しつつ、日々の課題に取り組んでいきたいと思います。